九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ポーランド語の与格非人称再帰構文とフランス語の受動的再帰構文 ： 総称性とアスペクト

井口，容子
広島大学大学院総合科学研究科 ： 教授

https://doi.org/10.15017/1495136

出版情報：Stella. 33, pp.17-27, 2014-12-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ポーランド語の与格非人称再帰構文と フランス語の受動的再帰構文

――総称性とアスペクト――

井　口　容　子

1．はじめに

スラブ語派の言語であるポーランド語は，再帰の接辞 się による豊かな中相範疇（middle voice）を形成している。これはフランス語の文法でいう「代名動詞」に相当するものである。筆者は井口（2013）において，ポーランド語の再帰構文のなかでも特に与格を伴う非人称再帰構文（以下,「与格非人称再帰構文」）に注目し，考察を行った。以下の（1）-（2）のような文がこの構文の代表的な例である。

（1）Tę　książkę pisało　　mi　się　　ciężko.
　　this　book.$_{ACC}$　wrote.$_{NEU}$　I.$_{DAT}$　REFL　hard
　　'I wrote this book with difficulty.'
　　（Rudzka-Ostyn 1996：366）

（2）Jankowi　pracuje　się　　dobrze.
　　John.$_{DAT}$　work.$_{3S}$　REFL　well
　　'John works well.'
　　（Rivero & Sheppard 2003：97）

井口（2013）は，この構文と日本語の「自発」との類似性を指摘し，さらにはフランス語の受動的再帰構文とも比較・対照を行った。本稿においてはそれをさらに発展させ,「総称性とアスペクト」の観点から問題を考察していく。

なお当該の構文は，ポーランド語研究において «Involuntary State Construction» と呼ばれており，Rivero, Arregui & Frąckowiak（2010a, 2010b）も，その略記 «ISC» という呼称を用いている。ただ本稿においては，フランス語も含め，ヨーロッパの言語に広くみられる再帰形態を用いた中相範疇の一環と

してこの構文を捉えるという意図に加え，この構文に特徴的な「与格」「非人称」の２点を明示するため，あえて「与格非人称再帰構文」と呼ぶことにする。

２．与格非人称再帰構文と総称性

井口（2013）においては，ポーランド語のいわゆる「非人称の się 」の構文が，スペイン語・イタリア語などロマンス語の「非人称の se / si」と同様，フランス語の「未完了型の受動的再帰構文」に近い性格をもつものであるのに対して，「与格非人称再帰構文」の方は，むしろ「中間構文型の受動的再帰構文」に近い振る舞いをみせるということを指摘した。ただ与格非人称再帰構文と中間構文とのあいだには，一見決定的とも思える相違が２点ほどみられる。ひとつは井口（2013）においてもふれた与格非人称再帰構文の事象叙述的性格であり，もうひとつは同構文における，与格補語による「動作の仕手の明示」である。以下に示すように，この２つはかなり密接な関係にあるといえる。本稿においてはこの問題を掘り下げて考えることにしよう。まず 2. 1. 節において前者の問題を考察し，その後 2. 2. 節で「動作の仕手」の問題につなげてゆく。

2. 1.　事象叙述 / 属性叙述

いわゆる「中間構文」は総称的性格を持つものであり，「叙述の類型」の観点からいうと「属性叙述文」であるとされている。一方，ポーランド語の与格非人称再帰構文はどうであろうか。Rivero & Sheppard (2003), Rivero, Arregui & Frąckowiak（2010a）によると，この構文においては与格の指示対象を動作主とする出来事（event）の生起が前提とされている。たとえば以下の（３）においては，「私がこの本を読んだ」という出来事が過去において生起したことが含意されている。Rivero & Sheppard (2003) は，仮に（３）の後に ‘but I did not read it.’ を意味する文を続けると，矛盾をきたすことになるという（p. 137）。

（３）Tę　książkę czytało　　mi　się　　z przyjemnością.
　　this　book.$_{ACC}$　read.$_{PAST.NEU}$　I.$_{DAT}$　REFL　with pleasure
　　‘I read this book with pleasure.’

Rivero, Arregui & Frąckowiak（2010a）はその点をとらえて，当該構文を «factual» と呼ぶ。このような点を考慮すれば，ポーランド語の与格非人称再帰構文は episodic な性格をもつものであり，むしろ「事象叙述文」といえる

のではないか，と思われてくる。井口（2013）においては，与格非人称再帰構文と「日本語」の「自発」との類似性を指摘したが，「自発」は本来 episodic な性格のものであることを考えても，うなずけることではある。

ただ，次の例を考えてみよう。

（4）Marysia mówi, że dobrze jej się szyje
Mary.$_{NOM}$ say.$_{3SG}$ that well she.$_{DAT}$ REFL sew.$_{3SG}$
bluzki z jedwabiu.
blouse.$_{ACC.PL}$ from silk
'Mary says that making/sewing blouses of silk is easy for her.'
（Rudzka-Ostyn 1996：366）

（4）における動詞は現在形におかれている。インフォーマントによると，この文は現在進行中の動作について述べているという解釈と，一般論として，当該人物にとっては常にそうであるという総称的な解釈の両方が可能であるという。つまり Marysia が実際にブラウスを縫いながら発話したという解釈もできるが，縫物をしている時ではなくても，一般論として自分にとって簡単である．という意味で発話したと考える解釈も可能なのである。

さらに以下のような現在時制の作例をインフォーマントに示したところ，いずれも現在進行的解釈 / 総称的解釈の両方が可能であるということであった。

（5）Tym piórem pisze mi się dobrze.
this pen.$_{INSTR}$ write.$_{3SG}$ I.$_{DAT}$ REFL well
「このペンを使うと私はすらすら書ける」

（6）Ten samochód prowadzi mi się łatwo.
this car.$_{ACC}$ drive.$_{3SG}$ I.$_{DAT}$ REFL easily
「私にとってこの車の運転は簡単だ」

現在進行中の動作について述べている場合は事象叙述文と考えうるが，総称的に解釈される場合は問題が残る。

しかしながら，ここで考えておきたいのは「事象（出来事）を記述する」ということと，「総称文」であることは必ずしも矛盾しないということである。Condoravdi（1989）は中間構文における総称量化（generic quantification）は，「出来事 event」を対象として行われるものとする。本稿においては，これとよく似た「イベントの総称化」の操作が，総称的解釈を受ける場合の（4），（5），

（6）のような与格非人称再帰構文においてなされているものと考える。中間構文の場合と異なるのは，イベントの動作主が特定の人物であり，与格補語として明示されている点である。次節においてはこの構文における「動作主」の問題を考察し，あわせて総称性の問題もより踏み込んで考えてみよう。

2.2. 動作主の総称化 / イベントの総称化

ポーランド語の与格非人称再帰構文の動作主の分析に入る前に，Fagan（1992）による中間構文の分析を考えてみたい。Fagan は，上記の Condoravdi（1989）とは異なり，中間構文は「出来事」ではなく「動作主」を総称化したものとする。This book reads easily. という場合,「この本」は「誰が読んでも」簡単に読めるのである。そこからこの「簡単さ」をもたらしているものは，読む人の能力ではなく，主語名詞句である「この本」の持つ属性であるということになる。この考えに立てば，中間構文の「属性叙述」的性格は「動作主の総称化」によりもたらされることになる。

（7）This shoe organizer mounts securely on a door or against a wall.
（Fagan 1992：151）

Fagan は，（7）の意味するところは「この靴入れがそのような性質をもつものとして作られている」ということであり，たとえ一度も実際に壁などにかけられたことがなくてもこの文は真であり得る，とする。出来事の積み重ねの上にそれを一般化したものではない，というのである（pp. 151–152）。この点において，中間構文は「イベントを総称化」したものとする Condoravdi（1989）とは異なる。

ポーランド語の与格非人称再帰構文の場合はどうであろうか。この構文においては，動作主に相当する人物は与格の形で明示されており，「動作主の総称化」ということはあり得ない。しかしながら,「イベントの総称化」とみなす解釈は可能である。（4）を，（現在進行的な解釈ではなく）総称的に解釈する場合を例にとると,「マリーシャがシルクのブラウスを縫うというイベントは，一般に容易に進行する」というほどの意味になる。これはいくつもの実際に行われたイベント（事象）の積み重ねの上に得られた帰結であり，Rivero, Arregui, & Frąckowiak（2010a）の指摘する，同構文の «factual» な性格と矛盾するものではない。

3．フランス語の受動的再帰構文と総称性

フランス語の受動的再帰構文の総称性は，いずれのタイプと考えるべきか。Lekakou（2008）は，「習慣的総称 habitual generic」と「傾向的総称 dispositional generic」を区別することを提案する。「傾向的総称」が主語名詞句の指示対象の属性が原因となって生じる一定の事態（regularity）を述べるものであるのに対して，「習慣的総称」は繰り返し生起する事象を一般化したものである。したがって「習慣的総称」と前節で述べた「イベントの総称化」は重なるものと考えてよい。筆者は井口（2010）において，この Lekakou の区別を取り入れ，フランス語の受動的再帰構文のうち「中間構文型」のものは「傾向的総称」と考えて差し支えないが，「未完了受動型」は「習慣的総称」とみなすべきであると主張した。

ただ，ポーランド語の与格非人称再帰構文と中間構文との間には，井口（2013）で指摘したような共通点があること，そして本稿において示した（4）-（6）のような総称的解釈を許す例文の，中間構文との意味的類似性を考えると，中間構文型もまた「イベントの総称化」と考える余地があるのではないかと思われてくる。この点については今後さらに考察を重ねてゆきたい。

4．アスペクトの問題

4.1. 完了体と不完了体

Rivero, Arregui & Frąckowiak（2010a, 2010b）は，与格非人称再帰構文においては dobrze ‘well’, wesoło ‘happily’ などの「様態の副詞句 manner adverbial」がほぼ義務的であるが，次の2つの場合には，明示的な様態の副詞句は必要とされないという。ひとつは動詞そのものが「非意図的 not voluntary」の意味を含意する場合で，以下の（8）の例がそれにあたる。

（8）Zaprószyło mi się ogień w łóżku.
set-on-fire.$_{NEU}$ I.$_{DAT}$ REFL fire.$_{ACC}$ in bed
‘I accidentally started a fire in my bed.’
（Rivero, Arregui & Frąckowiak 2010a：3）

zaprószyć ogień は ‘to cause a fire involuntarily’ の意味であり，語彙的意味のなかに「非意図的」であることが含意されているのである（Rivero, Arregui & Frąckowiak 2010a：5）。

もうひとつはコンテクストにより「非意図性」が担保される場合であり，次の（9）がそれにあたる。

（9）Napisało mi　się　　własne imię.
　　wrote.$_{NEU}$ I.$_{DAT}$ REFL own　　name.$_{ACC}$
　　'I wrote up my own name（by accident）.'

Rivero, Arregui & Frąckowiak（2010a）によると，目隠しをされて書いたのであるが，目隠しをはずしてみると偶然ちゃんと名前が書けていた，などと言った場合，この発話は可能であるという（ibid.）[1)]。

「様態の副詞句の制約」の解除をめぐるこの指摘は，興味深いものといえる。ただ，これら様態の副詞句を伴わない例を精査すると，Rivero, Arregui & Frąckowiak（2010a, 2010b）が指摘していない，もうひとつの共通点に気付かされる。それは，これらの文における動詞は，すべて「完了体」の動詞であるということである（（8）の *zaprószyć*,（9）の *napisać*）。

スラブ系の言語であるポーランド語の動詞が「不完了体」,「完了体」の2つの形を持つことはよく知られている。たとえば「読む」とうい概念を表す動詞には，不完了体：czytać，完了体：przeczytać の2つの形がある。

（10）a．［不完了体］（過去）　*Czytałem*　　tę książkę.
　　b．［完了体］（過去）　　Już *przeczytałem* to pismo.
　　（木村・吉上 1973：150）

木村・吉上（1973）によると，不完了体を用いた（10a）は「私はこの本を読んだ・読んでいた・読んだことがある」を意味し，読み終わったかどうかは問題にしていないという。話し手が言いたいのは要するに「読んだ」ということ，「読む」という行為を行ったということなのである。これに対して完了体を用いた（10b）は「私はもうこの雑誌を読んでしまった」という意味になる。（10b）において話し手が言いたいのは，「読むという動作をした」ことではなく，「読むという動作を完了したこと」，あるいは「読んでしまったからその雑誌の内容について知っている」など，「動作の結果の状態」であるという（pp. 150–151）。

与格非人称再帰構文に話をもどすと，「様態の副詞句」を伴わなくても許容される例として挙げられている2つの例（上記の（8），（9））の動詞は，いずれも完了体である。以下に示す（11）は Włodarczyk（1994）が与格非人称再帰構文の例として挙げているものであるが，これも様態の副詞句は伴っていない。

(11) Tak mu się powiedziało.
thus he.$_{DAT}$ REFL said.$_{Perf.NEU}$
'He said it in spite of himself ; Il a dit cela sans le vouloir.'
(Włodarczyk 1994 : 669)

この例においても，完了体動詞の powiedzieć「言う」が用いられている。筆者はこの文の動詞を不完了体の mówić「言う」に変えた（12）を，（11）とともにインフォーマントに示した。すると予想どおり，（11）に比べ（12）は容認可能性が下がるという結果であった。

(12) ?* Tak mu się *mówiło.*
thus he.$_{DAT}$ REFL said.$_{Imperf.NEU}$

4. 2. 「自発」「完了」「可能」

ポーランド語の与格非人称再帰構文において，「様態の副詞句」を伴わない例が許容されるのが完了体動詞を用いた場合に限られるのはなぜか。これについて我々は次のように考える。

自らのコントロールの外に起こる事象が完了したとき，往々にして良い結果もしくは悪い結果が付随してくる。次の日本語文を考えてみよう。

(13) 長い間の練習の甲斐あって，今日はじめて，100 キロのバーベルが持ち上げられた。（尾上 1998）

これは日本語学で「実現可能」もしくは「意図成就」と呼ばれる，「自発」と「可能」の境界的な構文の例である[2)]。この場合，「首尾よく持ち上げられた」のであろうが，「首尾よく」「うまく」などの副詞的表現は不要である。完了におかれた「可能」の形だけでそれを含意している。

一方，ポーランド語の例文（8）のような状況は，日本語の「思いがけず，ベッドで火を出してしまった」という表現に近い。「テシマウ」について寺村（1984）は，「終わったことに対する話し手の心理的反応を表す」用法を持つものとする。そして本来「完了」を強調する表現である「テシマウ」が，瞬間的な出来事や動きを表す動詞に付いた場合には，「そのことが起こって，もはや起こる前の状態にもどることはできない」という心理を表し，悲しみや後悔を伴うのがふつうである，という（p. 153）。

ポーランド語の与格非人称再帰構文に付せられる副詞的表現は，出来事に対

する，与格の指示対象の「快・不快」の心理的反応を表すものが多い。完了体動詞とともに用いられた場合には，日本語の「テシマウ」の場合と同様，あえてマイナスの感情を表す副詞句を付加しなくても，「後悔」などの含意が生じることは十分あり得るものと思われる。

4. 3. フランス語の中間構文型の受動的再帰構文と「完了」

フランス語の（14）に代表されるタイプの受動的再帰構文も含め，いわゆる「中間構文」は属性叙述文とみなされる。

（14）Ce livre se lit facilement.

そのためアスペクトの観点からいえば，点括相の動詞形態とは共起せず，複合過去の例は一般に許容されない。

（15）*Ce livre *s'est lu* hier soir.

ただ，se lire を用いた例で以下のようなものがみられる。

（16）J'ai fini Harry Potter et l'ordre du Phoënix. J'ai adoré et malgré les 1 000 pages à lire, ça *s'est lu* **tout seul** et c'est dur de reposer le livre à la fin.（インターネットからの例）[3)]

「1,000 ページもあったのに，ひとりでに（いつの間にか）読めてしまっていて，最後には本を置くのがつらいほどだった」というこの例をどう考えるべきか。同文においてもうひとつ興味深いのは，*s'est lu* の後の «tout seul» の存在である。これは英語でいえば «all by itself» といったところであり，「自発」と意味的関連の強い副詞的要素であるといえる。このような点からいえば，同文は「受動的再帰構文」ではなく，se briser，s'allumer などとともに「自発的再帰構文」[4)] とみなすこともできるだろう。だが（16）は，いわゆる「潜在動作主」を含意している点で，非対格動詞である se briser などとは大きく異なる。さらに注目すべきは，「読めてしまっていて」と日本語に訳したが，この文には「可能」のニュアンスが感じられることである。言うまでもなく「可能」は「中間構文」が含意するモダリティであり，そこに連続性を感じることができる。4. 2. 節でみた日本語の「意図成就（実現可能）」とも近いといえる。

Shibatani（1985）は，日本語の「れる・られる」や，ヨーロッパの言語の再帰構文などにおける「自発」から「可能」への拡張について，「自然発生的に生じる事態は，それが起こるべき強い傾向（propensity）を内包する」と述べて

いる。

«It is only one small step from the spontaneous to the potential. An event that occurs spontaneously has a strong propensity to happen.»（Shibatani 1985：839）

例文（16）もまた，自発的に完了した事象と「可能」との関連を感じさせる例であるといえる。ここにおいても，「自発」と「中間構文」との近接性がみられるのである。

5．結 語

以上，ポーランド語の与格非人称再帰構文と，フランス語の受動的再帰構文について，「総称性」と「アスペクト」の観点から考察してきた。「自発」の意味を含意する与格非人称再帰構文が，井口（2013）で指摘したように，いわゆる「中間構文」と共通する振る舞いを多々みせるのは，一見意外な印象を受ける。だが与格非人称再帰構文に，（4）-（6）のような事象を束ねた形での総称文として解釈される例も存在することを考えると，この2つの構文は，実は近接したものであることが納得される。

「自発」と「可能」は，「叙述の類型」の観点から言えば，前者が「事象叙述」であるのに対して後者が「属性叙述」ということから，対極にあるように思われがちであるが，「事態が成就する」ということを軸につながっている。前者はそれを「変化」の相でとらえ，時には「完了」した段階での「結果」にスポットライトを当てる。後者はその「事態（コト）の成立」を潜在的なものとしてとらえ[5)]，「可能性」という属性を対象である「モノ」に付与する。

フランス語の再帰構文についても，「自発的再帰構文」と「中間構文型の受動的再帰構文」は，この意味において連続性を持つものである。完了におかれた（16）のような例はそれを示しているといえる。

註

ポーランド語のインフォーマントは Urszula Maria Styczek, Krzysztof Mędrzycki の両氏にお願いした。厚く御礼申し上げる。

1）Rivero, Arregui & Frąckowiak は，北米先住民の言語であるセイリッシュ語族

（Salish）の「非制御構文 Out-of-Control construction」と，ポーランド語の与格非人称再帰構文の類似性を指摘する。例文（8）（9）は，セイリッシュ語族に属する St'át'imcets 語の例として Davis, Matthewson & Rullmann（2009）があげる文に対応するポーランド語文として Rivero, Arregui & Frąckowiak が示しているものである。

2）この構文にかんしては，尾上（1998, 1999），川村（2004）参照。

3）例文（16）は井口（2007）を執筆の際，匿名の査読者の方にお示しいただいたものである。

4）従来，フランス語学で「中立的代名動詞」といっていたもの（厳密には Ruwet（1972）のいう «neutre» のうち，se briser や s'éteindre のように，対応する他動詞の目的語を主語とする自動詞に相当するもの）を，ここでは「自発的再帰構文」と呼ぶ。

5）尾上（1998）は,「可能」と「事態成就」の関係を，以下のように「現実界 / 非現実界」という概念を導入して説明する。

（i）この煎餅はゆっくり噛めば食べられる。
［意図すれば生起する＝非現実界成立］

（ii）このみかんは食べられない。
［意図しても起こらない＝非現実界不成立］

（iii）煎餅が食べられなかった。
［意図したが起こらなかった＝現実界不成立］

（以上，尾上 1998：94–95）

参考文献：

Condoravdi, C.（1989）: "The Middle : where semantics and morphology meet", *MIT Working Papers in Linguistics* 11, 16-30.

Davis, H., L. Matthewson & H. Rullmann（2009）: "'Out of Control' Marking as Circumstantial Modality in St'át'imcets", Hogeweg. L,. H. de Hoop & A. Malchukov（eds）, *Cross-Linguistic Semantics of Tense, Aspect, and Modality*, Amsterdam, John Benjamins, 205-244.

Fagan, S. M. B.（1992）: *The Syntax and Semantics of Middle Constructions*, Cambridge, Cambridge University Press.

井口容子（2007）:「代名動詞の意味・機能的ネットワーク――自発，受動，非人称――」,『フランス語学研究』41，日本フランス語学会，31–44.

井口容子（2010）:「フランス語の受動的代名動詞と中間構文」,『ステラ』29，九州大学フランス語フランス文学研究会，67–77.

井口容子（2013）:「ポーランド語の与格を伴う非人称再帰構文――フランス語の受動的再帰構文との対照において――」,『ステラ』32，九州大学フランス語フランス文学研究会，111–121.

川村大（2004）：「受身・自発・可能・尊敬」，尾上圭介（編）『朝倉日本語講座 6　文法 II』，朝倉書店，105–127.

木村彰一・吉上昭三（1973）：『ポーランド語の入門』，白水社.

Lekakou, M.（2008）：“Aspect Matters in the Middle”, Biberauer, T.（ed）, *The Limits of Syntactic Variation*, Amsterdam, John Benjamins, 247-268.

尾上圭介（1998）：「文法を考える 6．出来文（2）」，「日本語学」vol. 17–9，90–97.

尾上圭介（1999）：「文法を考える 7．出来文（3）」，「日本語学」vol. 18–1，86–93.

Rivero, M. L., A. Arregui & E. Frąckowiak（2010a）: “Anatomy of a Polish Circumstantial Modal”, *Formal Approaches to Slavic Linguistics* 18.（http://aixl.ottawa.ca/~romlab/pubs/RiveroArreguiFra.2010.pdf）

Rivero, M. L., A. Arregui & E. Frąckowiak（2010b）: “Variation in Circumstantial Modality : Polish versus Sťát'imcets, *Linguistic Inquiry*, 704-714.

Rivero, M. L. & M. M. Sheppard（2003）：“Indefinite Reflexive Clitics in Slavic : Polish and Slovenian”, *Natural Language & Linguistic Theory* 21, 89-155.

Rudzka-Ostyn, B.（1996）：“The Polish Dative”, Van Bell, W. & W. Van Langendonck（eds）, *The Dative, vol. I : Descriptive Studies*, John Benjamins, Amsterdam, 341-394.

Ruwet, N.（1972）: *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Paris, Éd. du Seuil.

Shibatani, M.（1985）: “Passives and Related Constructions : A Prototype Analysis”, *Language* 61-4, 821-848.

寺村秀夫（1984）：『日本語のシンタクスと意味』第 2 巻，くろしお出版.

Włodarczyk, H.（1994）: “Les phrases à sujet anonyme et verbe réfléchi en polonais et en russe”, *Revue des études slaves*.（http://www.persee.fr/web/revues/home/prescript/article/slave_0080-2557_1994_num_66_3_6211）